同格の研究

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学
三ツ石　直人

1. はじめに

同格とは、my brother, Bobのように、名詞と名詞を並置させることで、一方の名詞がもう一方の名詞の説明要素になる関係のことを言う。My brother, Bobは中学校1年生用の検定教科書からの抜粋であるが、中学生では「同格」という言葉も使わなければ、取り立てて一つの文法事項として扱われることもない。それは、my brotherとBobが同一人物であり、「兄弟のボブ、ボブという名の兄弟」と容易に意味を解せるからである。筆者自身、同格関係にある名詞を見て意味が取れなかったという記憶もなければ、この文法事項に関して真剣に考えたという記憶もない。しかし、改めて同格関係に意識を向けてみると、疑問に思う点がいくつも出てくる。たとえば、my brother, Bobという同格関係に対して、別の検定教科書ではmy brother Tomという例がある。両者はどちらも同格関係にあるが、一方ではcommaがあるのに対して、もう一方ではcommaがない。このcommaの有無によって両者の意味をどう分けるのだろうか。また、a desire to be a teacherのようにto不定詞が名詞と同格関係になることがある。このto不定詞の品詞は名詞なのか、形容詞なのか。これと同様に、同格を表すthat節の品詞も、単純に名詞節と決定して良いのか。このように、同格の意味、同格の品詞性などを今一度考え直してみると、様々な問題点、疑問点があることに気が付いた。そこで、本稿では、同格について、最も基本的な名詞と名詞の並置というところから考察していき、同格を表す句や節まで研究の対象にする。なお、本研究を進めるにあたってcorpusを使用する。使用するcorpusはBritish National Corpus（以下、BNCと記す）で、そこから例文を収集し、検討していくことにする。このcorpusに関して情報を付け加えておくと、BNCは1980年代から1990年代初めのBritish Englishを対象に収集された、およそ1億語を収録するcorpusである。

2. 同格とは

まず、ここでは「同格」という言葉について考える。「同格」は英語でappositionと言う。Appositionはapplyを意味するapponereの過去分詞形、appositusが語源であり、apponere

はap-（near, toward）+ponere（place, put）から成る語である。よって、appositionは‘to be put near/toward’（何かの近くに置かれたもの、何かに向かって置かれたもの）が原義である。また、*The Concise Oxford English Dictionary11th ed.*（以下、COD[11]と記す）や、*Longman Dictionary of Contemporary English 6th ed.*（以下、LDOCE[6]と記す）では、次のように定義されている。

COD[11]:
a relationship between two or more words or phrases in which the two units are grammatically parallel and have the same referent
LDOCE[6]:
in grammar, an occasion when a simple sentence contains two or more noun phrases that describe the same thing or person, appearing one after the other without a word such as ‘and’ or ‘or’ between them.

以上のことから同格は、2語かそれ以上の名詞（句）がandやorといった接続詞の力を借りずに並列され、それらが同一の人や物であるという関係を同格と言う。

3. 名詞と名詞の同格

前節の通り、同格が同一の人や物を表す名詞と名詞が置かれるということは、つまり、その2つの名詞の間にはイコールの関係が成り立つ。たとえば、次の2つの例では、your friendとDr Kingsley、your friendとClarissaがそれぞれ並置されており、[your friend = Dr Kingsley]、[your friend = Clarissa]の関係になっている。

（1）your friend, Dr Kingsley （BNC）
（あなたの友人のキングスレー博士）
（2）your friend Clarissa（BNC）
（クラリサという君の友人）

3.1 制限用法と非制限用法

（1）と（2）は両者とも2つの名詞が並置されているという点では同じだが、並置された名詞と名詞の間に、（1）のようにcommaが置かれる場合と、（2）のように置かれない場合がある。両者の間に意味上の差異はないように見えるが、このcommaの有無に関してQuirk *et al.*（1985:1304）はMr Campbell, a lawyerとMr Campbell the lawyerという2つの例を提示し、後者の例に、“Mr Campbell the lawyer as opposed to any other Mr Campbell we know”

という説明を加えている。つまり、2つの並置された名詞と名詞の間には、関係詞節のように、制限用法と非制限用法という2つの用法があると言うことができる。したがって、(1) と (2) はそれぞれ以下のように関係詞を使って書き換えられる。

(1') your friend, (who is called) Dr Kingsley
(2') your friend (who is called) Clarissa

(1') では、your friendに対して関係詞の非制限用法が後ろに続いているため、Dr Kingsleyはyour friendを限定しているのではなく、補足説明的な要素になっている。一方で、(2') では、制限用法が後続しているので、「何人かいる友人の中でClarissaという友人」というように、Clarissaがyour friendを限定している。このように、一見すると (1) も (2) もほぼ同じ意味のように思えるが、同格関係におけるcommaの存在というのは随意的ではなく、その有無によって意味の差が生まれる。したがって、書き手は意識的にcommaを置いていると言える。

3.2 namelyとthat is to say

同格関係にある名詞と名詞の間には、次の (3) や (4) の例のように、namelyやthat is (to say) が挿入されることがある。

(3) the five largest textile factories, *namely* the Friendship Textile Mill, Mwatex, Mutex, Kiltex and Sunguratex (BNC)
(五大繊維工場、すなわちフレンドシップ・テクスタイル・ミル、エムワテックス、ミューテックス、キルテックス、そしてサンギュラテックス)
(4) our wish -- *that is to say*, the wish of myself and Michael Cullis (BNC)
(私たちの望み—つまり、私とマイケル・カリスの望み)

Namelyは、日本語で「すなわち、つまり」と訳されるが、COD[11]やLDOCE[6]では、以下のように定義されている。

COD[11]: that is to say; to be specific (used to introduce detailed information or a specific example)
LDOCE[6]: used when saying the names of the people or things you are referring to

Namelyに関する上記の定義をまとめると、that is (to say) と同義であり、具体的な情

報や例を付け加えるが、それはとりわけ、人や物の名前を言うときに使われる。Namelyはnameという名詞に-lyという接尾辞が付加されたものであるからして、その語根はnameであるとわかる。Nameの意味が「名前」であることから、「人や物の名前を挙げる時に使用される」というLDOCE[6]の定義は的を射ている。一方で、COD[11]はnamelyの定義にthat is to sayと掲載しているが、そこにはnameという語が含まれていないため、namelyと完全に同義というにはやや疑わしいものがある。そこで、that is to sayがどのように定義されているのかを見てみることにする。

COD[11]: used to introduce a clarification, interpretation, or correction of something already said.
LDOCE[6]: used to give more exact information about something or to correct a statement

上記の定義はどちらもほぼ同じことを表しており、that is to sayの役割は、すでに述べられていることをより明確にしたり、正したりすることである。したがって、that is to sayの方がnamelyよりも、同格関係にある名詞をより具体的に述べることに関して、広い範囲で使用することが可能である。一方でnamelyは、that is to sayの一部と重なるところはあるものの、that is to sayと完全に同義というわけではなく、それよりも使い方が絞られると言える。

3.3　意味の曖昧性

次の例のような場合、文の意味に曖昧さが生じることがある。

(5) They sent *Joan a waitress* from the hotel.　(Quirk *et al.* (1985:1306))
(6) They considered *Miss Hartley a very good teacher*.　(Quirk *et al.* (1985:1306))
(7) *The only son of a Congressman, John* was deeply interested in party politics.
(綿貫他 (2000:131))

(5-7) の例ではそれぞれ、名詞と名詞が並置されている。それゆえ、(5) ではJoanとa waitressが、(6) ではMiss Hartleyとa very good teacherが、(7) ではthe only son of a CongressmanとJohnが同格の関係にあるように見える。しかし、(5) と (6) の場合、そこで使用されている動詞の性質上、それぞれ、第四文型の文と第五文型の文としても読むことができる。つまり、(5) のa waitressはsentの直接目的語であり、(6) のa very good teacherはMiss Hartleyの目的格補語という読み方である。また、(7) の場合、文頭にbeingやsinceを補って読めば、the only son of a Congressmanを分詞構文と読むことができる。

したがって、(5-7) の例は下記のように、二通りの解釈が可能である。

(5a)　そのホテルから**ジョアンに一人の接客係**を送った。　[直接目的語]
(5b)　そのホテルから**ジョアンという接客係**を送った。　[同格]
(6a)　彼らは**ハートレー先生をとても良い先生である**と考えている。　[目的格補語]
(6b)　彼らは、**ハートレー先生というとても良い先生**のことを考えている。　[同格]
(7a)　ジョンは、**国会議員の一人息子なので**、政党政治に深い関心がある。　[分詞構文]
(7b)　**ジョンという国会議員の一人息子**は、政党政治に深い関心がある。　[同格]

実際のところ、(5-7) はどれも (a) のタイプで読むことが比較的に多いと思われる。しかし、文脈次第では、(b) のタイプで読むことも可能であるということを、ここで指摘したい。

4. 名詞と句、名詞と節の同格について

次の (8-10) の例のように、名詞だけではなく、前置詞のof、to不定詞句、接続詞のthatにより導かれた節を同格として使用することもある。

(8) news *of* his arrest (BNC)
　(彼の逮捕の知らせ)
(9) the misfortune *to die* suddenly (BNC)
　(突然死という不幸)
(10) the fact *that* we've got that list (BNC)
　(私たちがその一覧を手に入れたという事実)

4.1　同格句、同格節の品詞性

先の (8-10) の例は、これまでに挙げた名詞と名詞の並置という純粋な同格とは異なり、名詞の直後に前置詞句やto不定詞句、that節が置かれている。ここでは、これら3つの句や節の品詞性について考察していくことにする。

(8) のof his arrestは前置詞句であり、前置詞句は副詞か形容詞の役割を果たす。Newsとhis arrestが同格関係であることを考慮すると、of his arrestはnewsの補足説明的要素になっている。すなわち、of his arrestという前置詞句はnewsという名詞を修飾しているのである。名詞を修飾するのは副詞ではなく、形容詞であるからして、(8) の前置詞句の役割は形容詞であると判断できる。このofの同格の用法は、newsがどのようなnewsであるかを限定して説明しているので、限定のofから派生してできた用法だと考えられる。

前置詞句の品詞性は形容詞であるということがわかったが、(9) はどうだろうか。(9) の

場合は、名詞と同格関係にあるのがto不定詞である。このto不定詞は2通りの文法的解釈が可能である。1つは、to die suddenlyがmisfortuneを修飾し、その名詞を説明していると考えれば、形容詞だと言える。もう1つは、同格という意味関係を考慮すれば、[the misfortune = to die suddenly]が成立する。このイコール関係を踏まえると、品詞の上でもイコール関係が成立するはずである。つまり、misfortuneが名詞であるため、to die suddenlyも名詞とみなすことができるということである。したがって、同格を意味するto不定詞句の品詞性は曖昧であり、名詞か形容詞かといった品詞の決定は困難である。

このように、to不定詞は品詞の解釈に曖昧性が生じるが、(10) のように、同格節を導くthatにも同様の曖昧性が生じ得る。(10) において、the factの内容を後に続くthat節で説明しているため、to不定詞と同じように、[the fact = that we've got that list]の構造が認められる。したがって、that節は名詞節だと言うことができる。一方で、that we've got that listは、of our having got that listのように、同格のofを使った前置詞句に書き換えられる。前置詞句は (8) で説明した通り、形容詞として機能しているため、同様の意味のthat節を形容詞節として考えることもできる。しかし、必ずしも同格のofを使った句への書き換えが可能であるというわけではない。たとえば次の例のように、proposalは後続のthat節をto不定詞に書き換えられるけれども、同格のofで書き換えることはない。

(11) a proposal *that* we should do away with all these distinction (BNC)
(こういったあらゆる区別を撤廃すべきという提案)
(11') a proposal *to do* away with all these distinction

(11) のthat節は[propose that S+V...]を名詞構文にしたときに、そのまま残ったthat節である。つまりthat節は、proposalのもとの形であるproposeという動詞の目的語である。目的語を担う品詞は名詞であるため、このthat節は名詞であると判断できる。これと同様に、(10) のthat節もまた、名詞節であると考えられる。

ところで、名詞に後続するthat節には同格節の他に関係詞節がある。節の品詞性で言えば、同格節は名詞節で、関係詞節は形容詞節という点で異なる。では、その節を導いている接続詞のthatにどのような違いがあるかを見ていく。

(12) the fact *that* he knew nothing about agriculture (BNC)
(彼が農業については何も知らなかったという事実)
(13) the fact *that* he knew (BNC)
(彼が知っていた事実)

上記の2例は[名詞＋that節]の構造になっている。(12）のthat節は同格節であり、(13）のthat節は関係代名詞節である。どちらも節内に使用されている動詞はknewであり、この動詞は他動詞である。(12）ではknewの直後に目的語となる語があるが、(13）はknewの直後に目的語がない。それは、関係代名詞は節を導く接続詞の役割を果たすと同時に、knewの目的語となる代名詞の役割も果たしているからである。一方で、同格節を導くthatは接続詞の役割は果たしているものの、thatの直後に主語も目的語もある、欠損のない文であることから、代名詞的要素は持ち合わせていない。したがって、(12）も（13）も[名詞＋that節]という構造ではあるものの、そのthatの性質は代名詞的要素を持っているか否かという違いがある。そのため、thatに続く文の形態が完全か不完全かで異なってくるのである。しかし、次の例のように同格節か関係詞節かが曖昧な場合もある。

(14）the reason that they are not here now（BNC）
（彼らがここにいない理由）
(15）this time that Daisy is not going to leave her husband for him.（BNC）
（デイジーが夫の元を離れて彼のところへ行くこの時）
(16）the only way that she will be able to marry Mitch（BNC）
（彼女がミッチと結婚できる唯一の方法）

(14-16）の例のthat節は同格節を導くthat節とも考えられるし、thatをそれぞれwhy, when, in whichに書き換えられるので、関係詞節とも考えられる。なぜ、このような曖昧性が生じるのだろうか。同格節を導くthatの特徴は、その直後に欠損のない文の形態が置かれることは、先に述べた通りである。一方で、上記の例で書き換えが可能な関係詞は、関係副詞と[前置詞+関係代名詞]である。関係代名詞が接続詞と代名詞という2つの品詞性を持ち合わせた語であるのと同様に、関係副詞は接続詞と副詞という2つの品詞性を兼ね備えている。したがって、関係副詞は文全体では接続詞、節内では副詞の役割を果たしているのである。副詞はその品詞の性質上、主語や目的語などのような文の主となる要素にはなり得ない。つまり、関係代名詞の直後は不完全な文の形態をとるのに対して、関係副詞の直後は完全な文の形態となってしまうのである。これと同じことが[前置詞+関係代名詞]にも当てはまるが、こういった関係副詞や［前置詞+関係代名詞］が関係詞のthatに書き換えることができるのだとしたら、同格を導く節と全く同じ形を取ってしまう。そのため、そこに曖昧さが生じ、同格節なのか、それとも関係詞節なのかという判断がつかなくなる。同格節か関係詞節かの判断がつかないということは、つまり、名詞節か形容詞節かの判断もできないということになる。したがって、(14-16）の例におけるthat節はどれも、品詞の上で曖昧であると言える。

本節にて、様々な同格を表す句や節の品詞性について考察してきた。前置詞のofは形容

詞であると判断できたが、to不定詞は形容詞か名詞かを決定できず、また、reasonやtime, wayに続くthat節も、形容詞節か名詞節かを判断することができないということがわかった。しかしながら、句や節の品詞が名詞であろうと、形容詞であろうと意味に大きな違いはなく、本節においてあげた例文の句や節はどれも、先行する名詞の具体的な説明として機能しているということは間違いのないことである。

4.2　同格句、同格節を後ろに続ることのできる名詞

安藤（2005），中村（2009），綿貫他（2000），BNC、辞書類を参考に、同格を表すto不定詞句とthat節に先行する名詞を一覧にして下記に示す。

<to不定詞を後続させられる名詞>

Ability, anxiety, ambition, attempt, chance, condition, curiosity, decision, desire, determination, direction, duty, effort, failure, fortune, freedom, happiness, inability, intention, misfortune, necessity, occasion, order, opportunity, permission, persuasion, plan, promise, proposal, right, reason, refusal, reluctance, request, suggestion, tendency, time, unwillingness, way, willingness, wish etc.

<同格を表すthat節を後続させられる名詞>

Advantage, advice, agreement, announcement, answer, anxiety, argument, assertion, assumption, belief, certainty, chance, claim, command, comment, complaint, concept, conclusion, condition, confession, confidence, consequence, conviction, danger, decision, declaration, demand, desire, determination, difference, disadvantage, discovery, doubt, duty, effect, evidence, exception, excuse, expectation, explanation, fact, fear, feeling, hope, hypothesis, ground, guess, happiness, idea, impossibility, impression, information, instruction, knowledge, law, likelihood, message, mind, mistake, need, news, notice, notion, observation, opinion, order, point, possibility, pride, principle, probability, problem, promise, proof, prophecy, proposal, proposition, protest, question, realization, reason, record, remark, reply, report, request, result, risk, rumor, saying, sign, statement, story, suggestion, supposition, suspicion, time, theory, thought, truth, understanding, view, voice, way, wonder etc.

上には、同格を表すto不定詞を従えることのできる名詞と同格節を従えることのできる名詞をそれぞれ羅列したが、その中でも多いのは、直後にto不定詞やthat節を伴う動詞や形容詞から派生した名詞である。同格節を従える名詞は、to不定詞を従える名詞と共通する語も

いくらかあるが、総数の上で圧倒的に多い。この語数の差に影響を及ぼしているのは、動詞や形容詞から派生した名詞ではない名詞である。そのような名詞は、effectやfact, newsなどに代表されるように、具体的な内容説明を必要とする抽象度の高い名詞である。抽象度が高ければ、それだけ厳密な説明が必要となる。厳密な説明をするためには、to不定詞よりもthat節の方が適切である。それは、to不定詞には主語となる名詞や時制を明確に表せないからである。さらに言えば、助動詞を置くことも許されない。それに対して同格を表すthat節は、thatが接続詞であることから、直後に文の形態で内容を示すことができる。そうすれば、主語や時制も表すことができ、助動詞も使うことができるため、to不定詞よりも曖昧さを残さず、詳細に内容を示すことができる。それゆえ、抽象度の高いeffectやfact, newsのような語は、to不定詞よりもthat節の方が好まれるのだと考えられる。したがって、必然的に同格を表すthat節を伴う名詞の数の方が多くなるのである。

4.3　同格節を導くthatの省略

名詞節を導くthatは、次の例のように省略されることがたびたびある。

(17) I think (*that*) he is kind.

同格節もthatにより導かれた名詞節であるが、これに関して、柏野（2010:417）や中村（2009:102）などは省略しないのが普通であると述べている。だが、下記の例のように、thatの省略が認められる例はBNCでも多く見られる。

(18) Zambia's suggestion he should make himself known to the girl　(BNC)
　(彼が自分の名をその少女におしえるというザンビアの提案)
(19) the fact he was wearing his seat belt　(BNC)
　(彼がシートベルトを締めていたという事実)
(20) the news she'd bin drowned　(BNC)
　(彼女が溺死したという知らせ)
(21) a suspicion he could have been involved in some way　(BNC)
　(彼が何らかの形で関与していた可能性があるという容疑)

このような同格節を導くthatの省略は、主として口語に多く見られる現象であり、略式の用法である。特に、上に挙げた4つの例のうち、(20) がその顕著な例である。(20) のbinはbeenのことであり、音声上の特徴を文字化したものなので、口語であることは明らかである。

このthatの省略に関してもう一つ付け加えておく。同格の関係にある名詞とthat節の間に

はイコール関係が成り立つため、名詞とthat節の間にbe動詞を挿入し、第二文型の文に書き換えることができる。

(12) the fact that he knew nothing about agriculture
(12') The fact is that he knew nothing about agriculture.

(12') のような例の特徴として、中村 (2009:105) では、このthatも省略することはできないとしているが、下記の2つの例のように、thatを省略する例は存在する。こちらも、先に挙げた (18-21) の例と同様に口語でよくみられる現象である。また、(23) のように、thatが省略された箇所にcommaが置かれることがある。これにより、この文を発音する際にはbe動詞の直後にはpauseが置かれて上昇調になることがわかる。この発音上の特徴を活かして、thatが存在していた痕跡を残している。

(22) The fact is the situation is changing day by day. (BNC)
(事実、その状況は日々変化しているのである)
(23) The fact is, the child resembles Uncle Richard. (BNC)
(実際に、その子はリチャードおじさんに似ているんです)

さらに音声面で言えば、Quirk *et al.* (1985:1261) で指摘されているように、(12') のような例を発音する際にはbe動詞に強勢が置かれる。強勢が置かれると言うことは、つまり、そこに意味の重きがあるということになる。したがって、(12') の例はbe動詞を短縮してthe fact'sのように発音されることはなく (中村 (2009:105))、また、BNCでもそのような例を見つけることはできなかった。

ここまでthatの省略について述べてきたが、下記の (24) や (25) のように、同格節が外置されたり、namelyなどの語句により直前の名詞と切り離されたりする場合には、thatの省略は避けられる。それは、thatの省略により生じ得る曖昧さを回避するためだと考えられる。

(24) The thought came to her *that* she might never see the woman again. (BNC)
(彼女はもう二度とその女に会うことはないかもしれないという考えが思い浮かんだ)
(25) If you combine these three facts with another, namely *that* Dennis's fortieth birthday had fallen on the previous Thursday, an alternative explanation presents itself. (BNC)
(もしこれら3つの事実と別の事実、つまりデニスの40回目の誕生日がその前の木曜日に当たるという事実と結びつけるならば、また別の説明ができます)

(26a) The realization came *that* he couldn't do it. (Bolinger (1972:38))
(彼にはそれができないと、ふと悟った)
(26b) *The realization came he couldn't do it. (Bolinger (1972:38))

5. おわりに

本稿では、同格について考察してきた。名詞と名詞の同格関係に始まり、名詞と節、名詞と句についても、できる限り包括的に述べてきたつもりである。最後に本稿の考察結果を箇条書きにして締めくくりとする。

- 並置された名詞と名詞の間にcommaがある場合は非制限用法であり、commaがない場合は制限用法になる。
- 並置された名詞と名詞の間に挿入されるnamelyは、その語根にnameという語を持つように、人や物の名前を続けるときに使用する。
- That is to sayは、namelyよりも用途が広く、すでに述べられていることをより明確にしたり、正したりするために用いられる。
- 第四文型、第五文型、分詞構文のように名詞が連続する場合、その2つの名詞が同格と解釈できる場合がある。
- 同格を表すto不定詞句は名詞とも形容詞とも判断できない。
- 同格を表すthat節と関係詞節は、先行する名詞によっては見分けのつかない時がある。
- to不定詞や同格節か関係副詞か区別のつかないthat節は、品詞の決定が困難であるが、品詞はどちらであっても、意味に大きな違いはない。
- 同格節を伴う名詞と同格を表すto不定詞を伴う名詞とでは、前者の方が数が多い。その差を分けているのは、動詞や形容詞から派生された名詞以外の名詞の数である。
- 動詞や形容詞から派生された名詞ではない名詞がthat節を伴うことが多いのは、その名詞が抽象度の高い名詞であり、厳密な説明を必要としているからである。
- 同格節を導くthatは省略することが不可能とされているが、BNCの中には省略される例は少なくない。同格節を導くthatの省略は口語に多く見られる現象である。
- 同格節を導くthatがnamelyなどの語句によって名詞と切り離されたり、同格節が外置されたりした場合、曖昧さを回避するために、thatは省略されない。

参考文献：

荒木一雄, 安井稔（編）(1992)『現代英文法辞典』東京：三省堂。
安藤貞雄（2005)『現代英文法講義』東京：開拓社。
埋橋勇三（1995)『英文法講話』東京：ライオン社。

柏野健次（2010)『英語語法レファレンス』東京：三省堂。

中村捷（2009)『実例解説英文法』東京：開拓社。

綿貫陽, 宮川幸久, 須貝猛敏, 高松尚弘, マーク・ピーターセン（2000）『徹底例解ロイヤル英文法改訂新版』東京：旺文社。

Bolinger, D.（1972）. *That's That*. Paris: Mouton.

Close, R. A.（1975）. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

Curme, G. O.（1958）. *Syntax*. Tokyo: Maruzen.

Leech, G. and J. Svartvik（2002）. *A Communicative Grammar of English 3rd ed*. Harlow: Pearson Education.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik（1985）. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Zandvoort, R. W.（1959）. *A Handbook of English Grammar*. Tokyo: Maruzen.

参考 URL：

BYU-BNC <http://corpus.byu.edu/bnc/>

Collins English Dictionary <http://www.collinsdictionary.com/dictionary/english>

辞書類：

『ジーニアス英和大辞典』大修館書店（2001)。

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』小学館（1994)。

The Concise Oxford English Dictionary11th ed., Oxford: Oxford University Press 2004.

Longman Dictionary of Contemporary English 6th ed., Harlow: Pearson Education 2014.

A Study of Apposition

MITSUISHI, Naoto

The aim of this thesis is to mention apposition (including appositive phrases and clauses) comprehensively, raise several controversial points from it, and consider the points. They are as follows:

(1) the difference between apposition which has a comma and that which does not have one.
(2) the syntactic and semantic ambiguity on apposition.
(3) the reason why there are more nouns put before *that*-clauses than those put before *to*-infinitives.
(4) the ellipsis of *that* which leads an appositive clause.

In order to resolve (1), we compare apposition with a restrictive and non-restrictive use of a relative clause, and it is concluded that apposition which has a comma is equivalent to the non-restrictive use and apposition without a comma corresponds to the restrictive use.

As for the semantic ambiguity of (2), we pointed out the problem on a semantic interpretation. The sentences, such as (i) *We sent Joan a waitress*. (Quirk et al. (1985:1306)), (ii) *They considered Miss Hartley a very good teacher*. (Quirk et al. (1985:1306)) and (iii) *The only son of a Congressman, John was deeply interested in party politics* (Watanuki et al. (2000:131)), can be interpreted in two ways. *A waitress* in example (i) can be considered as both an appositive and a direct object. *A very good teacher* in example (ii) can be thought of as both an appositive and an objective complement. *The only son of a Congressman* in example (iii) can be viewed as both an appositive and a participial construction from which *being* is omitted. Although it is hardly likely that these noun phrases are usually read as an appositive, it can be suggested that the noun juxtaposition causes the double interpretation , such as example (i), (ii) and (iii).

We have more nouns put before *that*-clauses than those put before *to*-infinitives as we

mentioned in (3) . It is because there are a lot of abstract nouns in those before *that*-clauses. Abstract nouns need concrete explanations. Using *that*-clauses, we explain things more concretely than *to*-infinitives because the clause can clarify subjects, tense and modals but *to*-infinitives cannot.

Although it is said *that* that leading an appositive clause cannot be omitted, many sentences in which *that* is omitted are seen in *British National Corpus*. The sentences are spoken languages, not written languages. The conjunction *that* has no concrete meaning, and so it does not have any stress. It is concluded that no stress causes the omission of *that*.